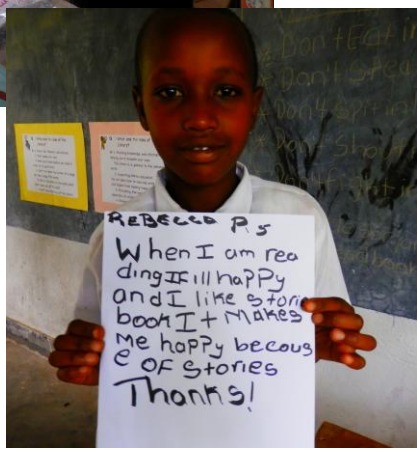
①英語の絵本約20冊を寄贈したウムチョムイーザ学園（ルワンダ）



倉庫を改装してつくった図書室

世界についてたくさんのことがわかるので私は本を読むのが好きです。それに、本を読むと、たくさんのお話を知ることができ、私は語り手にもなれます。
（図書館のお手伝いをしているハテゲカ・ルイズさん）

②Machakos Girl’s Rescue Center。海外青年協力隊隊員からの依頼で30冊を送付。（ケニア）

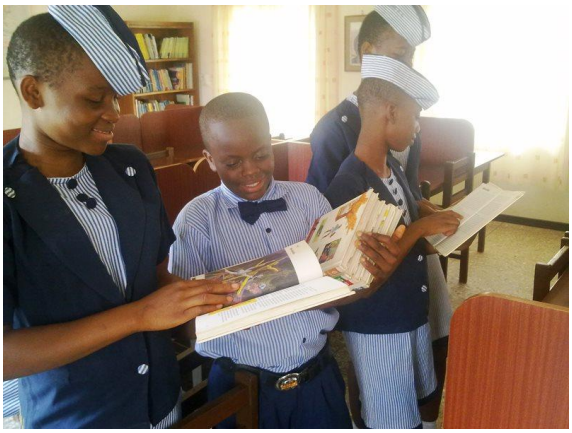
図書室で本を読む子どもたち

子供もたちが図書館にいって本を読む時間を
心待ちにしています。
本を送っていただいて本当にありがとうございました。
現在図書館のテーブルや椅子、本をJICAに申請しており、
学校側と協力し少しずつ拡大していくつもりでいます。
（海外青年協力隊　前野裕子さん）

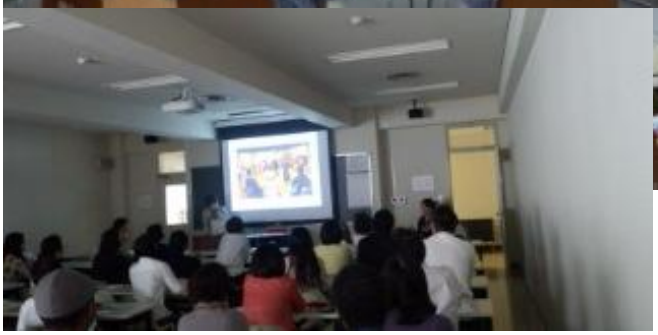
プロジェクトのリーフレットを活用して
図書館のルールを壁にはっています。

プロジェクトから届いた本たち

③子ども百科事典や絵本・読み物を送ったDominican Sisters’ High-school（ナイジェリア）



④「アフリカ子どもの本プロジェクトを知る会～８年の活動とアフリカの魅力を語る～」 2013.5.26



会員、一般来場者合わせて90名以上が参加。
楽しいひとときでした。

⑤立命館大学国際協力センターでの「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本展」2012.11.1～30

朝日新聞2013年6月2日朝刊

絵本で親しむ 人・暮らし

絵本を開いて、アフリカの暮らしを旅してみませんか？ タクシー運転手のおじさんを手伝う少年、おばあちゃんの昔話に聴き入る子どもたち――。生活感たっぷりの、素顔のアフリカに出会えるはずです。「アフリカ子どもの本プロジェクト」代表の翻訳家さくまゆみこさん(66)に、紹介してもらいました。

アフリカは いま 自然とつながる 歌と踊り 鮮やかな街 走るタクシー

「アフリカの音」（講談社）は、プロジェクトのメンバーの一人で、2010年に亡くなった沢田としきさんの作品。西アフリカの大地にタイコの音がきこえてくる。ヤギの皮でつくったタイコ。ヤギは音になり、また生きる――。自然とつながる暮らしの中で、歌ったり踊ったり。大地の恵みに感謝する人々を描いた。

「臼と杵で雑穀をついている絵は、農作業までも音楽であることを表現している。音楽は娯楽だけでなく、コミュニケーションの手段。暮らしの中心的な存在なのです」とさくまさんは話す。

「AはアフリカのA」（偕成社）は、ナイジェリア出身で英国に住む女性フォトグラファーによる写真絵本。「飢餓」や内戦のことばかりが伝えられるので、わたしは良い面を伝えることにしました」という作者の言葉が、本のカバーに添えられている。

AからZまでで始まる言葉で、暮らしや風習をたどる。Bはビーズのアクセサリーで着飾った女の子。Iはインディゴ（藍）染めの作業風景。「遊ぶ子どもたちは裸足だけど、表情の楽しそうなこと。写真だからこそ、より実感できるものがある」とさくまさん。

「いちばんのなかよし」（アートン新社）は、タンザニアのティンガティンガ派の画家による絵本。のんびり屋のゾウが、仲良しの働き者のネズミを裏切って――。タンザニアの昔話に基づく物語。登場人物が動物なのは、アフリカの昔話の特徴という。小さな村で語り継がれる話に人間が登場すれば、実在の人の悪口と勘繰られるかもしれないからだ。物語が単純な勧善懲悪にとどまらないところも、アフリカらしさだという。

アフリカの今を体感するなら「おじさんのブッシュタクシー」（アートン新社）。セネガルのブッシュタクシーは、乗り合いバスのようなもの。屋根に積まれた荷物やカラフルな客の衣装、街並みが楽しい。タクシーは赤ちゃんの誕生にも結婚式にも、葬式にも立ち会う。人の一生と喜怒哀楽が映し出される。整備不良の車があったり、お金持ちや移民が登場したり、社会のいろいろな側面を表現している。

お勧め127冊、サイトで

プロジェクトは04年、ケニアの村で図書館づくりに携わった有志で始めた。約120人のメンバーが、この図書館を支えるほか、日本の子どもにアフリカの文化を伝える活動をしている。

さくまさんは、約30冊のアフリカの絵本を翻訳してきた。「アフリカに暮らす〝人〟を理解するために、絵本はとても良い入り口」と話す。プロジェクトは、アフリカを知るために読んでほしい127冊のリストをウェブサイトhttp://www.hanamotane.com/frame/frame.html#で紹介、各地で巡回展も開く。

（田中陽子）

毎日小学生新聞 2013年5月31日

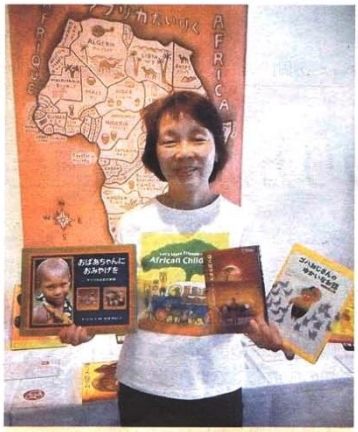
アフリカを知ろう

TICAD YOKOHAMA 2013

＝1面からつづく

本で知るアフリカ

多くの児童文学作品を翻訳しているさくまゆみこさんは、「アフリカ子どもの本プロジェクト」の代表です。さくまさんに、アフリカを知ることのできる本を紹介してもらいました。



アフリカを知ることができる本を紹介してくれた、さくまさん。手にしている本は、取り上げたものです

■高学年向け

「ぼくはマサイ ライオンの大地で育つ」（ジョゼフ・レマソライ・レクトン・著、さくまゆみこ・訳、さ・え・ら書房）

遊牧民の子としてケニア北部にうまれた若者が、10代でアメリカの大学に留学し、先生になるまでをたどります。

遊牧民の多くは学校へ行きませんが、主人公は家族を代表して入学します。サバンナでの生活や、厳しい境遇の中でも学び続ける力強い姿が、生き生きと描かれます。

著者は、遊牧民の子どもたちが教育を受けられるよう、活動を続けています。ケニアとアメリカという伝統と近代化の二つの文化を行き来し、懸け橋となった姿は、読者の目を世界に開いてくれます。

■中学年向け

「ゴハおじさんのゆかいなお話 エジプトの民話」（デニス・ジョンソン・デイヴィーズ・再話・著、ハグ・ハムディ・モハンメッド・ファトゥーフ、ハーニ・エル・サイード・アハマド・絵、千葉茂樹・訳、徳間書店）

エジプトの昔話15編を紹介しています。おじさんのゆかいな笑い話や、とんち話が集められていて、おもしろいお話ばかりです。さし絵は布絵で、イスラム教の模様を刺しゅうしています。伝統工芸の男性職人が、さまざまな色の布をぬいあわせたアップリケで表現しています。

■低学年向け

「おばあちゃんにおみやげを アフリカの数のお話」（イフェオマ・オニェフル・作・写真、さくまゆみこ・訳、偕成社）

写真を撮影したのは、ナイジェリアに生まれ育ち、今はイギリスに暮らしている女性です。息子たちに伝えようと、母国の文化や暮らしぶりを撮影して絵本にしました。

主人公はイガラ族の男の子。隣村に住むおばあちゃんを訪ねる途中、市場や村で出会ったものを通して10までの数とイガラの人たちの暮らしを伝えます。コマや水がめ、ひょうたんで作った民族楽器のイシャカも登場します。人と人とのつながりや市場の様子などから、日本と同じところや違うところが見えてきます。

―おわり